梅田歴史ヒストリア

むかし

茶屋町周辺は菜の花畑

江戸時代には茶屋町は池田街道筋に面していた事もあり、
往来の人々が菜の花の風情を楽しむためのお茶屋が三軒並び、
その茶屋に因み茶屋町という名前が生まれました。
また、豪商の松並竹塘という人がお茶屋で鶴を二羽放し飼いにした事に由来し、
鶴野町という名前が生まれ、これら茶屋を題材にした落語も生まれました。
今ではその菜の花の風情は遙か昔の物語となりましたが、菜の花で結ばれた、
人の輪、縁は今もこの茶屋町・鶴野町で生きています。

「菜の花や月は東に日は西に」

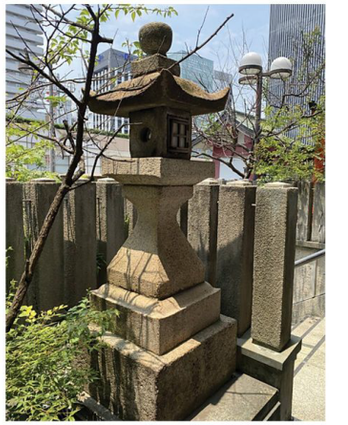
与謝蕪村の句碑について

蕪村は現在の都島区毛馬町に生まれ育ちました。
当時、淀川下流のこの一帯は綿と菜種の産地で
「春日和の日には川堤にのぼってよく遊んだものだ」と、
彼は後年回想しています。この一句はその時目に焼き
付いた一面鮮やかなこのあたりの菜の花畑が原像となっ
ていると思われます。
1774 年、京都東山での連句の第一句として詠まれました。

令和三年は

梅田にサツマイモが到来して200年！

今年(2021)、茶屋町の綱敷天神社御旅社にある石灯籠が、奉納からちょうど200年目である事を記念して、石刻されている文字の調査をしたところ、200年前にサツマイモを通じて埼玉県熊谷市の相上村(あいあげむら)と梅田が深い関わりがある事がわかりました。



享保二十年(1735)
徳川吉宗がサツマイモ栽培を
青木昆陽に命じて埼玉県川越
で始めさせる。埼玉県相上村でも
この後、栽培されたとみられる。

寛政年間(1801頃)
兵庫県尼崎市にサツマイモが
もたらされる。尼いもとして
親しまれた。この後、近畿各地
にもサツマイモが伝播。

文政四年(1821)
埼玉県相上村の関係者と考えられる
相上村屋由兵衛ら芋屋関係者によって
綱敷天神社に石灯籠が奉納される。
サツマイモの商売が上手くいった事
への神恩感謝の為と思われる。

埼玉県相上村(あいあげむら)の位置

中山道 熊谷宿
相上村もこの近くにあった

サツマイモと梅田

サツマイモは収穫期が秋であり、そのすぐあとに菜の花は種まきの時期である事から、江戸時代の梅田では、菜の花とサツマイモの二毛作をしていた可能性が高いと思われます。この文政年間の次は天保年間で、天保の大飢饉が発生していますが、ここ梅田の旧称である北野村の記録には天保の飢饉で飢餓に陥ったという記録は殆ど見られず、サツマイモによって飢えを凌いだ可能性も指摘されています。